

日本留学私記

権純哲

遊学のつもりだった、国を出る時は。生れて初めての外遊、最も気になっていた国、単に学問研究の中核といわれる大学の様子を見たいと思った。日本の次に、アメリカ、台湾をみて廻ろう、と考えてのことだった。だが、通り過ぎることが出来ず、やがて留学となる。

日々戦慄するような衝撃を覚える日本体験は、日本発見であった。たまたま、そこに映される韓国の陰影に出会い、自己反省の契機にもなった。

1975年高麗大学校哲学科に入学、故郷江陵から半島を横断して上京、学生生活を始めたものの、1ヶ月後、緊急措置の大統領命令による休校令が出され、前期は授業なしで終わった。催涙弾ガスが漂うキャンパス生活、2年次終了後、兵役29ヶ月を経て3年次に復学した1979年後期、勉強しようと心に誓ったところ、大統領が腹心の部下に射殺され、布かれた戒厳令下、新軍部による下克上のゲータゲタが起る。翌年は、民主化を要求する市民を武装軍隊が虐殺するいわゆる光州民主化抗争が起る。非道な惨事がつづき、軍事独裁政権打倒と民主化争取のために侃々諤々する中、歴史上の学問知識と政治権力について思いを巡らす日々だった。学業においては、韓国哲学史、先秦哲学、宋明哲学、インド哲学、仏教哲学を受講し、特に老莊哲学に惹かれたが、卒業論文には『中庸』の死生観を取り上げた。

卒業後、就職を考えながら踏み切れず、迷いを絶つべく、大学院に進む。卑怯者の逃避行であった。碩士(=修士)課程は、朝鮮王朝前期の方外人金時習の思想を取り上げた研究をもって修了、博士課程進学とともに、江原大学校哲学科の任期付き助手を勤め、非常勤で母校の教養課程「人間と国家：人間編」(国策科目国民倫理の別名)講義を担当した。大学生デモはむしろ激化していく中、研究すべき関心課題は増える一方、沈潜できず研究に進展のない日々が続く。勤務校教授の推薦もあって、打開と跳躍のための外遊を決心する。

1986年10月12日、東京大学大学院外国人研究生入学許可書を以て、成田空港に降りた。日本の空気を世界の空気として始めて吸った。当時の韓国は海外旅行の自由がなく、私費留学の場合、当該外国語の聞き取りと読解の試験に合格しなければ、パスポート申請ができなかった。また、安保教育の修了証がなければ、出国もできない時代であった。当時の私は、『日韓辞典』を片手に持たなければ日本の専門書や論文を読むことも儘ならず、会話となれば、旅人として一方的な質問が出来る程度の能力だったため、日本語試験には辛うじて合格というありさまであった。

来日して3日後、受け入れ指導教官(今は亡き溝口雄三教授)に会うため、東

京大学文学部中国哲学研究室に行く。面談は、2時間ほどだった。事前に覚えていた日本語で自己紹介をした後、留学の目的と今後の計画などについて回答したのだが、日本語での対話はうまくいかず、漢字用語は下手な中国語で発音したり、短い英語を交えたり、また筆談も併せての面談であった。

なぜ、日本に、東京大学に、さらに中国哲学研究室に来たか？先生は、私が外国人研究生出願書類として提出した研究計画書の内容を、あらためて精しく尋ねた。私は、大学院で東洋哲学（中国・印度・韓国）を学びながら韓国哲学を専攻したこと、特に朝鮮時代の性理学・実学の基礎となる古典解釈＝經学に関心を持っており、これからその研究を進めるつもりであると述べた。また、そのためには世界のトップレベルにある日本の中国哲学研究を直接経験したいと考え、東京大学に入ったとも語った。

漢文資料を中国語で音読した後、読み下しの訓読を行い、現代日本語に訳する、という東大中哲研究室の授業形式についてはあらかじめ聞いていたので、私は、「外国語（現代中国語）として漢文古典に接して日本の古典語（訓読）で解説し、現代日本語をもって再度解釈するような読書法を試みたい」と述べ、私の関心の程度をアピールした。韓国の大学院でも漢文古典を現代中国語で音読した後、現代韓国語に訳する演習経験があることを紹介することも忘れなかった。また、自分の専門が韓国哲学とは言うものの、その学問的基礎は、植民地期に出来たものであり、日本の韓国・朝鮮研究の実体も把握したい、ということも言い添えた。

最後に先生は「学位が欲しいか？」と問うた。私は「学位取得を目的に、日本にさらに東京大学にきたのではない」と明確に返答し、長くて2年ほどの滞在予定であるとも付け加えた。

概ね、以上のようなやり取りを終えると、指導教官担当授業の聴講を希望するのなら、出席してよい、と許され、演習資料を自らコピーして渡してくれた。翌日から受講することとなった。

中国哲学専攻の学部（王陽明の南贛郷約）と大学院（朱子語類）の演習に出席し、見物人のように聴講したが、その内容は刺激的で肌で感じるが多かった。研究室壁面書棚の図書は勿論、隣接する漢籍コーナーの蔵書には圧倒された。日々大学を探検するかのように過しているうち1年が過ぎ、博士課程をもう一度やり直したいという気持ちが芽生え、意を決した。指導教官に相談したところ、中哲研究室では、いまだ博士課程への編入を認めたことがないので、もし進学したければ修士課程の入試を受けるしかないとのことだった。だが、その一方で、指導教官は「博士課程に編入したいのであれば、隣の中国文学研究室での進学が可能だし紹介することもできる。東洋史学研究室についてはあとで調べてみる」とも言ってくれた。そうか、学則には博士課程の入試について明記されているのに、研究室ごとに入試の実態が異なっているというのには、さすがに驚いた。ならば、諦めるしかない、という思いもよぎった。

翌年、新学期が始まったばかりのある日、指導教官から「来年度から博士課程編入を実施することにした」と告げられた。私の相談が中哲研究室の方針転換のきっかけになったのである。こうした紆余曲折を経て、私の本格的な留学は始まった。2年半にわたる研究生の生活を経て、私は中哲専攻博士編入第一号となった。以後、留学生の編入がつづく。

入学後、文部省の奨学金申請の推薦書を求められた際、指導教官は「特に学業に熱心で愛国心が強く」と記す。私は「愛国心か……」と思った。2年次からは奨学金に恵まれて博論に専念することができた。在籍4年目の初夏に博論「茶山丁若鏞の経学と経世思想」を提出する。夏休みには、ハワイ大学の韓国研究センター、UCバークレー校の東アジア研究所、そしてハーバード大学の燕京研究所を歴訪見学し、アメリカの東アジア研究、特に韓国研究の現場とその雰囲気を経験することもできた。当初、目的としていた2ヶ国目の外遊が叶った瞬間だった。

そうしたなか、私もようやく博士課程を修了したあとの人生計画を思案することになった。アメリカ大学のスカラシップに応募し、結果をみながら、1年間、今後の研究準備をしてから日本を発つ計画を立てた。1992年12月には博論審査も終わり、1993年1月に課程修了となった。

ある日、博論主査をつとめた小川晴久教授から電話がきた。「昨日、研究室教官会議で、ある大学教員公募の推薦依頼について協議中、君を推薦したらどうか、という話になったが、君はどうか？」というのである。私は、まず驚き、内心戦慄しながら聞いていた。どう答えればよいか思案し、深呼吸をしてから、こう言った。「大変ありがたく、光栄なことである。だが私は、日本で就職するために留学したのではない。博論作成中に出来なかった資料調査と収集を一年間行った後、帰国するつもりである」、「研究室に優秀な学生がいるから、その誰かを……」と断ったのである。すると教授は、「じつは、それがだめだと先方から言われたから、君のことが話題になったんだ」と教えてくれた。そして最後に「赴任地は、韓国とも近く、歴史的にも関係深いところで、君には悪くないと思ったが、君の意向を聞いたので、分かった」と言って電話を切った。

その電話以来、私はなかなか落ち着かず、いろいろ考えながら悩み続けることになる。2夜に亘って考え続けたあと、私は先生に電話し、「一昨日お話しがあった件、今も有効ですか？」と、恐るおそる尋ねた。先生は、「昨日、推薦候補者無し、と返事したばかりなのに」ときつく叱りつけたあと、「この電話を切ってしばらく待ちなさい。先方に連絡して確かめてかけ直すから」と言ってくれた。

しばらくして電話が来た。「すみません、余計にご迷惑をおかけしまして」と謝ると、「今日が書類提出の締め切りだそう。書類の準備は出来ているのか？ならば、今日の消印まで有効だから」、「今、メモの用意をしなさい、必要書類を伝えるから。そして、郵便局にて書留発送したら電話しなさい」と言い、公募に間に合うよう段取りを整えてくれた。

こうした波瀾を乗り越えて、私は国立山口大学・教養部・東洋文化論担当教官公募に応募することになった。「授業に対する抱負」と「これからの研究計画」の作文を完成させ、所定の書類を発送した午後、電話で報告すると、先生は私に「結果はわからないものだから、待つみだ」と言った。

約1ヶ月後、面接の連絡がきた。一次の書類選考に通ったのだ。二次試験では50分ほどの模擬講義が求められていたため、私は博論の要約と東洋文化論の授業への思いをまとめ、当日の準備をした。

3月初め、二次試験のために山口大学に行ったが、面接らしきことはせず、主は模擬講義であった。まず、博論の構想から完成までの経緯と博論内容を説明し、自分の関心や問題意識も併せて語った。そして授業への思いについて語り始めたところで、「この辺で充分ですね」と、ある選考委員が遮った。時計を見ると、50分をやや過ぎていた。選考委員からは、「外国籍の教員採用が初めてだったので、日本語での講義について直接確認したかった」とだけ説明され、二次面接は終了。私の日本留学の延長が決まった。

帰り道、いろいろ考え自問した。我が人生において本当にいい選択だったのか、と。だが、それと同時に、今はこの道を行こう、教えながら学ぶという二つの異次元の留学になる、とも考えた。いまにして思えば、この選択は“三次元”であったともいえる。日本で東洋文化を教える韓国人の教官となったのだから。

1993年4月、山口大学教養部新任の文部教官講師の辞令を受け、東洋文化論演習を受講する新入生に会った。私が大学生になった1975年生まれという妙な縁を感じ、誠を尽くすと心に誓った。

東洋文化論の講義が始まった。だが、日本でいう東洋文化とは何か？ ヨーロッパやアメリカではどうか？ また中国では？ それを理解してもらわなければ、本論に入ることは出来ない。そのために、まずは語意の説明から入った。だが、受講生の表情を見ても相手が理解してくれているかわからない。自分の説明がどの程度伝わっているのかが測れない。さらに、この語の発音を間違った、受動態にすべきだった、などなど、当初は講義をしながら自分の力の及ばないところを見つけられることが多かった。受講生が200人以上になる大教室でのマイク講義、十数人程度の演習、それぞれ異なる緊張があり、その準備に悪戦苦闘する毎日であった。

同僚の支えが大きかった。公私とも助言を惜しまない先輩、私の些細な質問に親切に答えてくれる同期新任がすぐ隣りにいた。昼食をともにし、たまには飲み会やドライブにも誘ってくれたのだ。このような日々が続くうちに、私の日本語能力は、自分が驚くほど上達していった。日本近代文学専門の隣人の恩が大きかった。また、たまたま私が人事選考委員として関わった同僚は、のちに“レスリング哲学者”になる。振り返ってみると、この多次元空間は、友情の思い出製作所であったのであり、我を支えてくれる滋養分の源泉であったように感じる。

「明治維新ゆかりの地」と書かれたモニュメントが国道脇に立っていた。山口大学の本部がある吉田キャンパスの正門から歩いて行けるところに、最後の韓国統監・初代朝鮮総督をつとめた後、内閣総理大臣になった寺内正毅生誕地の石柱があった。また、車で萩まで足を延ばせば、明治維新を成し遂げ、帝国建設に奔走した“偉人”たちを輩出した吉田松陰の松下村塾がある。見学するたび複雑に深まる感慨。「親思う心に勝る親心」と刻まれた岩の前に足を止めて、若き国士の心に思いを寄せてみた。山口県立大学附属の寺内文庫、山口大学経済学部図書館の旧東亜経済研究所蔵書を閲覧しながら、あの時その時のことを想像してみた。

採用は専任講師だったが、同年度内に助教授に昇進できた。先輩同僚の助言に励まされて論文二本を公表した業績が評価されたのである。その論文のひとつは、博論の一部を書き直したもの、もうひとつは、博論には入れなかった原稿を練り直したものであった。また、科学研究費申請を勧められ、思案の末、「近代日本の朝鮮研究に対する調査研究」を新たな留学の研究課題に決めた。博論作成中、現代の諸問題の本源は近代にあることに気づき、日本で働くうちにやれるテーマ、やるべきテーマを考えてのことであった。山口大学図書館所蔵の著者寄贈印がある林泰輔『朝鮮史』を手にとった時の感覚もこの研究計画を後押しした。彼は、山口高等中学校助教授として、この先駆的業績を世に送り出したのである。

翌年、採択の通知があり、異次元の留学に拍車がかかる。研究調査のために、屢々東京に出たのだが、まるで郷帰りのような感じがした。東京・文京区・本郷は、わたしの故郷なんだと、擬似感覚に気づかされたものだった。一方、日本近代における学問知識の産室であった東京大学本郷キャンパスは、私にとって調査対象の遺跡、博物館だった。久し振りに総合図書館の蔵書を見直しているうちに、経済学部図書館にある意外な蔵書に驚きつつ、資料コピーに明け暮れる日々だった。今は国会図書館デジタル・ライブラリで公開されている、近代日本の朝鮮研究に関する資料の収集とともに、私は、近代日本の学習に着手した。

年度末が近づき、研究報告をどうするか、思索に耽っている時、一通の手紙が届いた。それは、埼玉大学教養学部関口順教授からのものだった。私の受け入れ指導教官溝口雄三先生の停年退職記念パーティーで初めて挨拶し、決まったばかりの山口大学採用について聞かれて話したことがある程度だった関口先生が何の用だろう？ 封を開けてみたら、「拝啓 人事選考委員会において第一候補者として推薦されたので……」と続く。心身が震えたが、それは以前とはやや異なる感覚だった。私に対する予想外の評価はさて置き、人事異動を誘うくだりになると、思考停止。……運命か、どうしろというのだ、やっと慣れてきたのに、と心の中で呟いた。3年任期付き採用だが、特別な問題がなく、継続の意思さえあれば延長可と言われた山口大学では、今スタートした研究に一定の進展があれば、帰国しても研究は持続可能と考え、日々生活していたところ。この誘いを受け容れたら、もう抜け出せない羽目になるのではないかと苦悶した。誰にも相談でき

ず、妙な不安ばかりが増していった。

手紙の予告通り、その翌週には電話が来た。経緯について再度詳細に説明を受けた。埼玉大学教養学部は、従来の中国文化コースに朝鮮部門を加えて東アジア文化コースに改めることになったので、新体制が安定するまでぜひ協力してほしい、ということだった。私の意向はどうか？ 山口大学教養部における生活や今の状況はどうか？ といった質問はあったものの、私はこの提案を正面から素直に受け入れるほかなかった。面接の日はすぐに決まった。

時は、大学設置基準の大綱化によって国立大学の教養部解体がほぼ決まり、その方法を巡る議論が盛んになっていた頃。山口大学教養部の場合、さまざまな将来構想が学内合意を得られないまま漂流し、各学部から一本釣りで誘われる教員が少数いるのみで、多くの教養部教員は捨て子のような状態だった。対して、埼玉大学は、より早く教養部教員の分属方針を決め、教養学部独自の将来計画を確定していたようである。その新しいビジョンによって私は救われることになった。裏切りのような後ろめたさとともに自分の決心を告白した時、同僚たちは「良かったのではないか」、「いいなあ、羨ましいよ」と喜んでくれた。

だが、そのとき周囲に妙な空気が漂っていたことも確かだ。それを変えてくれたのは、江戸時代の上田秋成を専門とする同僚が放った一言だった。私と同じ年生まれの2日だけ早い彼は、独り言のように、「埼玉大学には、武井和人という研究者がいる。自分は会ったこともなく、論文を通して名前は知っているだけだけれど」、「それが埼玉大学について知っていることのすべてだ」と言った。この言葉が沈黙の空間を破り、私を解き放してくれた。武井和人という人のおかげであった。

武井さんと私との一方的な縁は、このように結ばれた。そして、私はこの二人の日本古典文学研究者の青春時代の道楽に際会したことがあって、二人のコラボの舞台が今、私の記憶倉庫で披露されている。エレキギターを弾く武井さんの真剣かつ重厚な表情に、シクラメンの香りを歌う秋成研究者の軽快かつ親愛の表情が、交差しながら想起される。2日だけ兄貴の秋成研究者とは、一昨年末、久しぶりに他の山口大学時代の同僚とともに再会し、翌年（2020年）停年退職後再雇用という話を聞き、祝杯を挙げることができたが、2歳上となる先輩の停年退職に際しては、隣りの研究室にいながらも、コロナ騒ぎのため何もできなかった。この未練と、今、思い出す昔のエピソードが、この文章を書かせる原動力になっている。

さて、こうして、私は思い残すことなく面接に臨むことができた。人事選考委員会の内部推薦という、今は昔の人事だったため、面接から採用まではトントン拍子で進み、私は任期付き条件のない助教授に任用されることになった。教授ビザの日本在留許可3年に変わりはないが、日本人教員と同じ処遇の雇用を意味するこの決定は、当時、他の国立大学がどうだったかは分からないが、破格的であ

ったと思う。

面接の場では「埼玉大学を選んだ理由は何か?」という質問に続いて、「元々留学に来ただから、いつかは帰国するだろう、埼玉大学にはどのくらいいるつもりか?」と聞かれた。私は、まず山口大学での経験を踏まえて、「山口大学は旧制山口高校に師範学校、経済専門、獣医畜産専門、工業専門と医学専門を合体して設立されたため、地方国立大学のなかでは規模が大きく、その分、教員負担も重いという側面がある」、「今は教養部解体の嵐が吹き荒れ、教養部教員の多くが早期転出の希望を持っている」と答えたくえで、埼玉大学は東京にも近く研究上の利便性が高いと述べた。また、「いつか帰国するだろう」という問いかけに対しては、日本留学の動機、山口大学に応募した当時の思いを語ったうえで、「帰国に関しては、機会に巡り合うことができるかどうかという運任せの状況にあり、それがいつになるかは分からない」と、率直に伝えた上、「今この面接に来た以上、出来る限りのことはやるつもりであり、自ら今の研究を止めて帰国する考えはない」と答えた。

選考委員会面接の質疑応答が終わったあと、すぐに赴任後担当科目に関する説明を受けた。東アジア(中国・朝鮮)文化コースに所属し、朝鮮文化関係の授業を担当すること。コースの開講科目には、東アジア(中国・朝鮮)文化基礎演習、朝鮮文化概説、同特殊講義、同演習、そして朝鮮語があり、その他に大学院の担当が加わる、とのことだった。担当科目についての具体的な説明を聞いているうちに、私は朝鮮という言葉自体に違和感が増してきた。もちろん、朝鮮という用語は知っている。韓国語、ハングルまたはコリア語などの名称もあったが、朝鮮語という科目名はごく一般的なものだった。また、近代以前の思想を研究する者として、朝鮮文化という科目名も理解することは出来る。

だが、韓国人教員である私にとって、朝鮮語という科目名は受け入れ難いものがあった。なぜならば、私が教えられるのは、韓国語であり、朝鮮語ではないから。私は、「朝鮮語という科目において韓国語を教えるとは、おかしいのではないか」と述べた。

このような反論があるとは、予想もしなかったようであった。その場にいた誰も戸惑いを隠せなかった。「朝鮮語とは、歴史的に朝鮮半島の人々が使ってきた言語を指す」、「韓国語とってしまうと南に限られ、政治的な偏りを感じる」というのがそのときの返答だった。

もちろん、この認識に間違いはない。だが、そもそも外国語の教育／学習というのは、それが指し示す相手がいてこそ成り立つものである。日本人のいう朝鮮語とは、相手が実在しない空虚な名称である。敢えて実在する相手は誰かといえ、それは朝鮮民主主義人民共和国の人々ということになる。一方、韓国の人々にとって、朝鮮語という言葉は大日本帝国による植民地支配を想起させるが、そのことを自覚する日本人は極めて少ないように感じる。

現在、国交があり人々の往来が頻繁なのは韓国ではないか。ならば、韓国語を学習し教育することを基本にすべきであり、この点である種の政治的意味を帯びるのはやむを得ない。また、南と北はそれぞれ標準語が異なっており、私が教えられるのは、韓国語であり、朝鮮語ではない。このような説明を加えることで、私の認識は多少とも納得してもらえたようであった。

1995年4月、私の赴任とともに、東アジア（中国・朝鮮）文化コースがスタートした。開設科目名は、朝鮮文化と韓国語となっていた。開講科目は、ひとりではとてもカバーできないので、非常勤の支援を得て開講することができた。4年後には、朝鮮文化という名称も韓国文化に改められ、東アジア（中国・韓国）文化コースとなった。ちなみに、ワールドカップ日韓共催の2002年、大学センター試験外国語科目に韓国語が加わった。

2003年には大学院文化科学研究科博士課程日本アジア文化研究専攻が新設され、私は東アジア思想（韓国）研究特論担当となった。国立大学の法人化（2004年）以後は、再び学部改組により日本アジア文化専修の東アジア（中国・韓国）文化専攻所属となって今に至る。2012年に採択された教養学部のグローバル人材育成推進事業によって海外派遣留学生の数も海外からの受け入れ留学生も増加している。大学院修士課程には英語による日本研究プログラムが用意され、日本アジア文化専修には英語による科目群が開設されている。

振り返ってみると、埼玉大学に赴任した当時は、国内外において大学の国際交流が盛んに叫ばれた時であった。教養学部は、すでにオーストラリアのモナシユ大学と交流をしていたが、埼玉大学全体が国際交流に対する本格的な取り組みを開始するまで相当の歳月を要した。

ある年末、学長主催の教職員集会に出たところ、国際交流担当課長から声をかけられ、韓国の大学と姉妹関係を結びたいのだが、高麗大学校はどうだろうか？他の大学でもよいので、ぜひ懸け橋になって欲しい。大学本部としては全面支援するから」と切に頼まれたことがある。それに対して私は、「実際のところ、今求められるのは学生交流だが、埼玉大学はその体制が出来ていない。外国語教育に対する基本方針もそうだが、韓国語が外国語教育に含まれていない現状では、先方の大学にどのように説明しても応じてもらえないだろう。今は無理だと思う」と述べたものの、知り合いを通じて打診してみることは約束した。じつは当時、韓国のいくつかの大学から直接間接に交流協定の打診を受けていたが、私はそれに応じずにいた。

このようなやり取りを経て、私は高麗大学校との交渉を開始した。すでに転出した女性課長の熱意に後押しされて三年かかり交流協定を締結（2004年）させることができた。まず、高麗大学校から研修生5名が送り出され、少し遅れて埼玉大学からも研修留学生を送り出すようになった。日韓交流は順調に進んでいった。ただし、韓国語は、大学改革の煽りを受けて全学の初修外国語に加えられ、

今に至っている。

私の担当する韓国文化の受講生は、通常、各科目5名から20名の幅で推移する。年によっては40名を超える時もあったが、受講生ゼロの経験はない。卒業論文指導は、3年次編入で埼玉大学に入学した学生に始まり、しばらくその傾向が続く。1年からの進級生で最初に指導したのは、高麗大学校への派遣留学第一号の学生であった。卒論指導学生がいない年も何回あったが、年2、3名で推移し、最も多いときは5名を抱えた。大学院生に関しては、修士課程も博士課程も指導学生がいる年より、いない年がやや多かったように思う。赴任当初からの期待に応えるために力を尽くしたつもりではあるか、自信はない。

つい最近、偉い人から真面目な顔で「停年までしっかり頑張ってもらいたい」と言われ、赤面したことがある。自分では頑張っているつもりでやっては、やはりいけないということ。上からみると、姿勢も弛み貧弱な結果がより一層目立つのだろう。

日本アジア文化専修体制になってからは、科目区分に「研究法」が設けられ、韓国文化研究法という科目ができた。その馴染みのない科目を教えるために、どのような内容を盛り込むかは難題であった。韓流が人気を呼んだ時でもあったが、かといって現代の表象文化を論じるには力量が足りないため、私は、自分の専門と隣接する歴史・言語を中心にして中国と日本との関係を視野に入れた韓国言語文化史ともいえる講義案を作成することにした。具体的には、漢字借用に始まる文字文化の共通性に関する考察、古代文化の代表的産物である建国神話の比較、僧侶と士大夫官僚にみる知識教養の共有、訓民正音（ハングル）の文字史上の意義、そして植民地朝鮮統治期における近代学問の移植や國語強要による近代漢語の定着など、歴史の断層に化石のように存在する言語文化遺産を取上げて再考しようとする目論見であった。受講生には、韓国文化研究の課題と方法を学んでもらいたいと考えたが、学部授業としては難度の高い内容を強いたと思う。よく堪えてくれた受講生には心から感謝したい。

最後に、研究について一言。冒頭で異次元の留学という表現を用いたところで、私は「近代日本の朝鮮研究に対する調査研究」というテーマに至るまでの経緯を精しく記したが、最初の成果は、このテーマを決めてから3年度に埼玉大学教養学部紀要に発表した「高橋亨の朝鮮思想史研究」という論文であった。意図せずとも、近刊の『完本：高橋亨京城帝國大學講義ノート』（朝鮮思想史編）〈朝鮮儒學史編〉が最終成果となると思う。東京大学への留学から山口大学を経て、流れ流されたどり着いた私の日本遊学は、こうして終点を迎えつつある。埼玉大学での26年間、大韓帝国における日本人の学術文化活動、近代翻訳書、近代国家学・反国家思想の受容、朝鮮総督府機関誌『朝鮮』、植民地期雑誌『国民文学』、高橋亨京城帝國大學講義などの研究を行ってきた。もちろん、それぞれの研究成果には、意を盡し得なかったことへの不満と反省がある。振り返ってみると、私の研

究生活は問題の種を拾うための放浪に費やされており、余計な問題を発掘しては無駄な重労働を続けることも多かった。だが、逆にいえば、私が見て廻ったものは、きれいに整理整頓された近代日本文化イメージの裏面に拡がるもの、すなわち、発掘・開墾・洗浄を待つ学知の荒野であったと言えよう。

埼玉大学教養学部の韓国文化講座26年を顧みながら、その将来を、日韓関係の今後とともに案じつつ、勝手ながらこの場を借りて、書き残したい私の日本留学記を認めてみた。いろんな先輩同僚のことを思い出しながら。

別れには準備が要る。来日してもう35年。私の長かった日本留学もこの一年で終る。(2021.2.10)